**まとめ（Introduction～Chapter1）**

＜Putnamのソーシャル・キャピタル理論＞　　※黒の枠内が筆者による批判！

社会的結束（social cohesion）が強まる

アメリカの例でこの一連の流れを示そうとしたけどできなかった…。

批判①

リベラル（個人主義）の枠組みで集めたデータを「**社会**」に応用している

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ソーシャル・キャピタルが豊かだと…

**ソーシャル・キャピタル**

●ソーシャル・キャピタルとは？

社会的生活の特徴※（**ネットワーク**、規範、信頼）

　　　　　　　　　※共有の目標を追求するために、参加者たちが効果的に協働することを可能とする

　　　　　　　　　●３つの尺度

批判②

信頼、規範、ネットワークという指標は一貫して変化するものではない

信頼（trust）、規範(norms)、

**ネットワーク**(network)

POINT：ネットワークが全ての基本！個人間のつながりを重視！

批判③

量的調査ではアソシエーションの

種類は見分けられない

Cf. アソシエーションの種類

（１）組織内の結束を強める

（２）組織同士の結束を強める

　　　　　　　　　●根本にある枠組み（大切！）

　　　　　　　　　　・リベラル主義（liberal）⇔社会民主主義（筆者の立場）

　　　　　　　　　　　国の介入を最小限に抑えた積極的な市民社会が社会的結合を維持

　　　　　　　　　　　（つまりは…個人の力＞政府の力）≒**個人主義（ミクロな視点）**

**教育**

※もともとは社会的成果に貢献するもの

（ソーシャル・キャピタルでは「社会」の概念がより個人的に！）

**まとめ（Chapter1後半部分）**

＜筆者の社会的アプローチ＞

**社会的結束（social cohesion）**

尺度：信頼、市民協力、犯罪率 **批判②：尺度に一貫性を持たせた！**

**所得の平等**

**教育の平等**

**社会的アプローチとは？**

　「社会的結束を社会的な視点から見ること」

　　　　　　　　　＝**社会民主主義（マクロな視点）**の枠組みが根幹にある!!

　●社会民主主義の考え方

　　政府や公的機関が社会的結束を維持政府＆公的機関＞個人

　　cf.　価値観や集団的アイデンティティー形成はDurkhemianの社会民主主義理論に基づく

　　　　 ※この辺に「文化」が関わってくる

●方法

　　・**国家間比較分析（**Comparative, cross-national analysis）**批判①：個人比較でなく国家比較に！**

　　・**質的データ分析※**　**批判③に対応：量的データではなく質的データに！**

**＜論点＞**

**①本文中の「societal approach」とは「社会民主主義の枠組みで分析」という解釈であっているか？**

**（まとめの図で表した解釈が正しいのかを確認してもらいたい　※今後の本文解釈にも影響！）**

・Our concerns with equality and with the role of the state and public institutions in underpinning social cohesion place the analyses here clearly within the frame of

social democratic theorizing about education and social cohesion. (p.9/ l.35)

・An alternative approach to social cohesion is to view it from a societal perspective.

(p.33/ l.29)

　 （＝A societal approach）

**②どうして筆者は、「文化や制度」の影響を考慮する上で国家間比較分析が適していると考えているのか？**

**筆者の主張の抜粋**

**◆グローバリゼーションについて**

・But concern over social cohesion is also part of a more fundamental questioning of what society means in a world transformed by globalization.(p.1 / l.14)

・Increasing social pluralism and lifestyle diversity in the advanced states, in part the product of globalization, call into question older sources of social cohesion and produce new foci for identity and engagement.(p.1 / l.20)

**＜POINT＞**

**・グローバリゼーションによって、従来の社会という枠組みが崩れてしまった**

**→文化や政治などがより多元化した社会が増えてきている　ex.多文化社会**

**◆筆者の述べる国家間比較分析の利点**

・A cross-national societal approach to social cohesion is likely to differ from an individual-level human capital or rational choice perspective in other important ways. It will start from the assumption that all relationships are context-bound, that is to say specific to historical times and places and the structures and environment that pertain to them (Forey and Edwards 1998). (p.34 / l.27)

**＜POINT>**

**・国家間比較分析は、（Putnamが用いたような）個人をベースにした分析とは異なっている**

**・相関関係を考える上では、2者だけではなく、背景にあるコンテクストにも目を向ける必要がある**

・It would also imply taking institutional cultural factors seriously. (p.34 / l.37)

＊it は前文までのまとめ：ある関係性が特定されても、それが全ての環境で関係があるとは言えない

**＜POINT>**

**・関係性の背景にある、制度的影響や文化的影響にも注目しなければならない**

　①　　　集団／共同体 ②

個人

個人

集団

集団

　　結びつき 　　　　だけでなく

　　　信頼 　　　　　共通認識

　　　　　↑

文化的影響 ・制度的影響

・Comparative, cross-national analysis, on the other hand, is almost bound to attend to the importance of cultures since there is overwhelming evidence that countries do in fact differ substantially, regularly and enduringly on a whole variety of cultural measures, not least to our concerns, in terms of aggregate levels of trust, association, political engagement and tolerance. (p.35 / l.4)

**＜POINT>**

**・国家間の比較分析ならば、関係の背景にある「文化の重要性」にも目を向けられる**

**◆筆者の主張まとめ**

前提：グローバリゼーション⇒国の中の政治形態や文化が多様になっている

BUT…

国家間比較分析（国ごとの統計データを用いた分析）を行えば、制度的影響や文化的影響を踏まえた分析ができると述べている

**◆私たちの疑問**

・国ごとの政治形態や文化が多様になっているのであれば、国ごとに統計をとっても制度的影響や文化的影響を反映させられないのでは？？

　⇒わざわざ国ごとに統計を取る意味はあるのだろうか？

　　例：A国（イスラム系コミュニティー、中国系コミュニティー、マレー系コミュニティー）

　　　　⇒コミュニティーごとに統計を取ったほうが、文化の影響は反映されるのではないか？